

くるま旅

Kuruma Tabi



特集

女性が求める
キャンピングカーライフ



奥様方に
聞きました!!

キャンピングカーマダム達の 本音に直撃

CASE
1

匿名希望

ご夫婦とも30歳代 ドイツ製トラベルトレーラーを所有

結婚前から続くキャンプは生活の一部

千葉県在住のOさん夫婦は、トラベルトレーラーでキャンプを楽しんでいる。旦那さんはかつてロープロファイルの輸入クラスCを所有していたが、「キャンプ場をベースにお風呂や買い物に行くには、トレーラーと乗用車を切り放せた方が便利」と判断。コンパクトなドイツ製トレーラーを買った。

奥様は、キャンピングカーがはじめて。しかし、結婚前からご主人のキャンピングカーを使ってキャンプを経験しているので、すでに「キャンプ」が生活の一部になっている。

現在のキャンピングトレーラーを選んだ理由は、まず取り回しの良さそうなコンパクトサイズの割にはベッドが広がったこと。あとは内装・外装のデザインセンス。販売店の印象も良かった。

宿泊場所はほとんどキャンプ場。トレーラーの場合は、キャンプ場と相性がいい。道の駅などで仮眠するのはマナーの問題も絡むし、安全性においても心配がある。

旅行プランは、すべて旦那さんにお任せだが、料理などは共同で作る。キャンピングカーを持って新しい楽しみ方が広がった。トレーラーを使えば、自然を満喫しながら快適な生活ができるようになって、キャンプが楽しいとも。

「女性が欲しくなるキャンピングカー」を自分で企画するならば、やはり使いやすさを最優先する、と奥様は言う。装備が複雑になると、どこに何があるか分からず、結局使いこなせないからさうだ。

CASE
2

塚口ファミリー

30歳代ご夫婦 国産バンコンを検討中

ミニバンでの車中泊に不便を感じて

塚口夫妻の奥様がキャンピングカーに関心を持ったきっかけは、子供たちやその友だちも乗せて、小旅行を楽しみたいと思ったからだという。言い出したのはご主人の方だった。

それまでは家族でミニバンによる車中泊をしていたが、子供の友人たちも同行する機会が増え、車両を狭く感じるようになった。またミニバンの凹凸のあるシートでは寝づらいつ感じようになった。

そこで探し始めたのはハイエース系のバンコン。それなら自分でも運転できそうに思えるから、と奥様。キャブコンは運転が無理そう。小型サイズのものもあるが、見た目の違和感がある。

近所の人たちは「キャンピングカー」というと、みなキャブコンを想像し、ワンボックスのキャンピングカーが存在することを知らない。だからキャンピングカーの話題になると、みなキャブコンを意識して

「高そう。運転が大変そう」と言うらしい。

欲しいバンコンは、就寝機能だけに特化したようなシンプルもの。シンクなどは弁当箱ぐらいの大きさで十分。対面シートも要らないくらい。それでも8ナンバーにこだわるのは、3ナンバーより税金が安いから。バンコンを買ったら、夏はキャンプ。冬はスノボを楽しむつもり。だから4WDが欲しい。

ウインドウが外に張り出しているクルマは、側面や後方の視界が妨げられそうで嫌い。窓面積はできるだけ広い方がいい。男の人はサイドミラーだけでバックができるが、女性はルームミラーまで見ないとバックができない。だから、リヤウインドウの見えないクルマは敬遠している。

CASE
3

小谷田夫婦

ご夫婦とも40歳代 軽キャンパーを所有

夫婦で出掛ける、時間に縛られない自由な旅

小谷田さん夫妻は、普通乗用車でペンションに泊まったり、車中泊を楽しんでいた。しかし、ペンションに泊まるには予約が必要であり、時間的な制約を受ける。また、乗用車の車中泊ではベッドがフルフラットにならないため、疲れがとれない。

そんな不満を感じていたとき、奥様がテレビの報道でキャンピングカーの存在を知り、欲しくなったという。

それまでご主人はキャンピングカーに興味はなかったが、奥様のお話を聞いて、パソコンや専門誌を見ていろいろな情報を集めるようになった。

車庫事情や道路事情、経済性などを考慮すると、軽自動車キャンピングカーがベストという選択になったという。ポップアップ機構があるクルマを選んだのは、就寝スペースと荷物スペースが増えるという判断から。水タンクと流しが付いているため、車内で顔を洗えたり、歯を磨けたりするので便利だと感じた。

運転は、奥様と旦那さんが交互に行う。しかし、奥様も運転が好き。狭い道に入っても困らないので、運転がとても楽しかった。今までオートキャンプというのをやったことがなかったが、このクルマを買ってからは、逆にキャンプに興味を持つようになった。今では少しずつキャンプ用品を揃えるのが楽しみ。

キャンピングカーを購入した後も、いろいろなキャンピングカーショーを回り、他のクルマなどに付いている装備類も研究する。参考になるものがあれば、自分のクルマなどにも取り付ける。そういう工夫を凝らすこと自体が、とても面白いという。



奥様方に
聞きました!!

キャンピングカーマダム達の
本音に直撃

CASE 4 **大東夫妻**

□ 50歳代 □ 国産バンコンを所有

そろそろ日本一周の旅へ

大東夫妻は、キャラバンベースのバンコンを7年間使っている。
その昔は、クルマにテントを積んで、テントキャンプを楽しんでいた。しかし、テントは撤収が大変。特に雨が降ったときは苦労が絶えない。そこで、子供が大きくなって“2人旅”になったことをきっかけに、キャンピングカーの購入に踏み切った。
運転はもっぱらご主人だが、高速道路などに入ったときは、奥様も運転する。乗用車に比べ、目線が高くなるので、運転はしやすいという。
現在乗っているバンコンは、縦寝の2段ベッドタイプ。横に2人で寝るのは窮屈だが、上下に分かれて一人ずつ寝られるので安眠できる。
今までの旅行のテーマは主に温泉めぐり。冬はスキーも楽しむ。
基本的に、車内では調理をしない。それよりも、旅先で料理の美味しい店を探し、地元の味に舌鼓を打つのが楽しみ。
定年退職したので、そろそろ日本一周用のクルマへ買い替えることも検討中だという。北海道や東北も回りたいし、スキーも楽しむとなると、どうしても断熱性の高いクルマが欲しくなる。
検討しているのは小型のキャブコン。今までバンコンに乗り続けて来たので、キャブコンの自由なレイアウトや居住性、断熱性に魅力を感じるようになったという。

CASE 5 **匿名希望**

□ ご夫婦とも20歳代 □ 現在購入予定はなし

乗用車の車中泊から、キャンピングカーへ

ご夫婦とも、どのようなキャンピングカーを購入するかということに対して、具体的な考えは持っていないと話す。
しかし、ミニバンで車中泊を始めたばかりなので、その延長線上にあるキャンピングカーに興味を持ち始めたところだという。
ご主人はもともとスキーが趣味。バイクのレースなどもよく観戦に行く。そのために車中泊を始めたが、荷室に段ボールを敷いて寝ているので、寝心地もよくないし、腰も痛くなる。ゆくゆくはキャンピングカーになるだろう…という見通しは立てているとか。
車種までは絞りきれないが、欲しい装備の見当はついてきたという。
車中泊の体験から、奥様は車内で手や顔を洗えるシンクは必需品と考えているようだ。ナマモノのお土産などを買って帰ることを考えると、冷蔵庫もあれば便利。クルマの中でトイレを使うことには抵抗があるが、ポータブルトイレなどもあれば安心とのこと。
キャンピングカーショーに行って驚いたことは、電子レンジを搭載したクルマがけっこうあったこと。最近は冷凍食品が充実してきているので、電子レンジがあればかなり食事のメニューが充実してくるだろう、と奥様は目を輝かす。
外装デザインの話になると、奥様は「もっと派手な色のクルマがあってもいいと思う」とのこと。ご主人がそれにつけ加えて、「迷彩色のキャンピングカーがあればきっと目立つ」と笑う。
ただ、キャブコンのフロントグリルに関しては、ご夫婦で意見が分かれた。
「トラックみたいなグリルには興味がない」という奥様に対し、「あのスクエアな顔が頼りがいがありそうに思える。風に弱そう! という表情が男の覚悟を表現しているようでカッコいい」と楽しそうに話した。



JRVAは、女性のくるま旅を応援しています

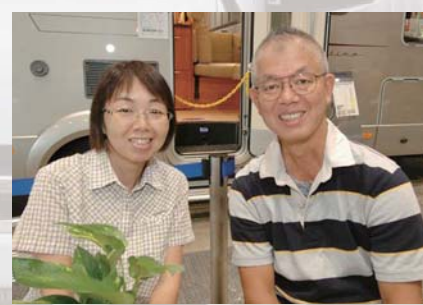


CASE 6 **横山夫妻**

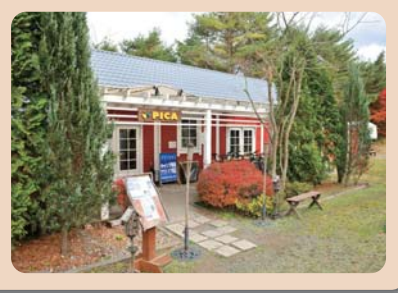
□ 50歳代後半 □ ドイツ製クラスAモーターホームを所有

夫婦で出掛ける、時間に縛られない自由な旅

ご夫婦のキャンピングカー歴は11年。国産キャブコンを2台乗り続けた後、輸入モーターホームを2台乗った。
奥様がキャンピングカー旅行を経験するようになったのは結婚後。それまでは鉄道を使った一人旅を楽しんでいた。温泉めぐりが好きだったという。
キャンピングカーを利用するようになってからは、行動範囲が飛躍的に広がり、旅の充実度が深まった。
旅の基本プランは、旅の番組や旅雑誌を見ながら、ご夫婦2人で練る。さらに詳細情報を調べるのは奥様の役目。図書館まで出向き、参考書を見つけては旅行プランの肉付けを行う。
宿泊は、キャンプ場や道の駅のような場所はあまり使わず、人に迷惑のかからないような、山や高原のちょっとした景色のよい空き地を探して休む。そういう場所を探すために、レンタカーを借りて下調べをするほど念を入れる。
公共のマナーには特に気をつけているという。基本的に、食事は車内。周りに他のクルマや人がいないことを確認できたときだけ、外に椅子を持ち出し、お茶を飲みながら鳥の声を聞く。
騒音の防止とエコを意識して、発電機は使わない。代わりにソーラー充電による電気の確保を心がけている。それでもソーラー充電には限りがあるので、夜はローソクの明かりを頼りに過ごすことも。車内に微かにとるローソクの明かりが、なんともいえない風情をかますという。
これからの時代は自然との共生が大事、とご主人は語る。その点ソーラーはCO2を出さないし、ローソクの明かりは大自然の夜の静けさとも調和する。
自然の息吹をたっぷり吸ってくつろぐことが、夫婦のワーク&ライフバランスを合わせることに繋がっているという。



□撮影協力(ロケ地)
PICA富士西湖
〒401-0332
山梨県南都留郡富士河口湖町
西湖2068-1
TEL.0555-20-4555(現地フロント)
<http://saiko.pica-village.jp/>



□撮影協力(小道具)
マウナロアMMJ
〒150-0013
東京都渋谷区恵比寿1-15-6
オークツービル1~3F・5F
TEL.03-5421-0043
<http://www.maunaloa-mmj.com>



皆様からのご意見・ご感想お待ちしております

今回の「くるま旅Vol.6」はいかがでしたか? 皆様の素敵なくるま旅の参考になれば幸いです。また事務局では皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。「こんな事が知りたい」「こういう特集をやってほしい」などのご要望や、「○○道の駅のこれは美味しい」「私の★★★キャンプ場」「こんな動物と出会った」等々、あなたのくるま旅のエピソードをお寄せください。写真も大歓迎です。十人十色のくるま旅のお話を聞かせて下さい。採用された方には粗品を進呈します。

宛先 〒194-0022 東京都町田市森野1-10-10 ペアシティエンドウビル2-A
日本RV協会事務局「くるま旅編集部」まで

くるま旅 Vol.6
□発行 日本RV協会(JRVA)
□編集 株式会社自動車週刊誌
□印刷 図書印刷株式会社
〈無断転載を禁ず〉
2010年2月1日発行 Printed in Japan 2010

キャンピングカーは「男のロマン」から「男女の調和」へ

女性が求める キャンピングカーライフ

夫婦円満の秘訣は、旅にある。

家族の絆の確認も、また旅にある。

それは、旅が、日常生活からの脱却をもたらすために、
それまでの人間関係を新しく見直すきっかけ与えてくれるからだ。
そのとき、夫婦は、当たり前すぎてお互いに見逃していた、
それぞれの魅力を再発見するかもしれない。

子供は、親の思わぬ優しさに触れ、心をおおらかに開くかもしれない。

親は、子供のひたむきさに接し、新たなエールを送るようになるかもしれない。

そんな心の通い合う旅を、家族に与えてくれるのが、キャンピングカー。

今、そんな「家族の触れ合い」をキャンピングカーに求める女性が増えている。

彼女たちは、男性以上に、キャンピングカーが「家族の交流」を深める乗り物であることを理解し、
積極的に活用することに目覚めてきた。

今までは、キャンピングカーの楽しみを奥様や恋人に伝えるのは男性の役目であったが、
その男性たちを上回る勢いで、キャンピングカーの効用を肌で感じる女性が増え始め、
それがキャンピングカー市場を大きく変えようとしている。

キャンピングカーは、「男のロマン」から「男女の調和」を実現する乗り物として、
新しいテーマを背負うことになった。

この号では、「女性が求めるキャンピングカーライフ」の実状を、
アンケート調査やユーザーインタビューなどを通して追求する。

Woman's Campingcar Life

「女性から見たキャンピングカー」 調査からうかがえる奥様方の心模様



料理指導 木村元一

日本RV協会は昨年暮れに、「くるまクラブ」に所属するキャンピングカーユーザーのうち主婦層および女性オーナーを対象として、女性とキャンピングカーのつながりを調べるためのアンケート調査の結果を公表した。

この調査は、キャンピングカー選びの基準やその使い方に対し、男性と女性の意識の違いを調べようとしたもので、24項目が設定され、1,388件の回答が寄せられた。

このようなキャンピングカーをテーマにした本格的な女性アンケートははじめての試みであり、業界にとっても貴重なデータとなった。

アンケートから見た女性ユーザーの年齢層は40歳代(31.1%)と50歳代(30.1%)に集中し、その二つの世代で61.2%を占めることが分かった。

また「パート及びアルバイト」と「会社勤務」を含め、なんらかの仕事を持っている女性が44.5%に及び、専業主婦の39.2%をわずかに上回った。

キャンピングカーに興味を持ったきっかけを尋ねると、「ご主人が話題にするようになったから」という答えが圧倒的に多く、全体の58.4%を占めた。

次に多かったのは「キャンプ場などで見かけて、便利そうに思えたから」という答えで、14.6%だった。

以下、「テレビや雑誌などで見て面白そうに見えた」(7.9%)、「友人・知人が持っていたり、よく話題にしていたから」(5.8%)という順になった。

また、普通の乗用車で「車中泊」を繰り返しているうちに窮屈さを感じるようになり、それをきっかけにキャンピングカーに関心を持つようになったという答えも目立った。

面白いところでは、「私が知らない間に、主人が勝手に購入していた」、「主人がこっそり準備し、いつの間にか(旅に)連れ出された」という「巻き込まれ型」の購入であったことを告白した女性もいた。

キャンピングカーを持ってからご家族(夫婦)の話題に変化が生じるようになったかどうかを尋ねたところ、「主人や家族との間に『旅』や『趣味』の話題が増えた」と答えた

女性は57.9%に達し、続いて「キャンプや旅行で知り合った人々との交流が話題になった」と答えた人が21.3%もいた。

また、キャンピングカー旅行中に「自分たち夫婦は相性が悪い」と思ったことがあるかどうかを尋ねると、「まったくない」という回答が55.3%。「ときどきある」という回答が39.5%。「よくある」という答が4.1%だった。

どのような場合に、夫婦の相性が悪いと感じたかを尋ねると、「旅行中に、見物したり買い物したりする興味の対象が合わない」(40.0%)、「時間のテンポが合わず、立ち寄り湯の待ち時間などをめぐってイライラする」(24.3%)などという声が寄せられた。

また、夫人の立場からキャンピングカーを選ぶときの決め手となったものを複数回答で尋ねたところ、一番多い答えは「サイズ」(58.6%)だった。それとほぼ同じぐらいの比率(57.8%)で、「価格」という答えが浮上した。3番目は「装備類の充実」(45.0%)、4番目が「デザイン」(27.5%)、5番目が「乗車/就寝定員」(27.4%)だった。

多くの夫人は、キャンピングカーを選ぶときに、まず「サイズ」と「価格」を検討し、そこである程度の候補車を選んでから、「装備類」の充実度を比較していくというプロセスを取っている様子がしのばれた。

女性が使いやすいキャンピングカーの機能として何が必要か? という設問に対しては、「豊富な収納スペース」という回答が半数を超える51.2%に達した。二番目は「個室トイレ/洗面室などの機能」というもので21.7%だった。

それに続き「しっかりしたキッチン機能」(18.2%)、「エアコンやヒーターといった冷暖房機能」(16.6%)という順になった。

上記の回答以外に、「その他」という項目を設けて記述式で答えたもらったところ、特に多かったのは「ベッド機能」に対する意見だった。特にベッドの広さと、ベッド展開が簡単であることを求める声が目立った。

また、自分がキャンピングカーの開発者になったと仮定して、女性が欲しくなるキャンピングカーを開発するときが一番心がけるもの何かと尋ねたところ、下記のような回答が寄せられた。

「装備類を使いやすくして、シンプルな機能に絞る」(45.7%)、

「家庭内と同等の充実した快適装備を確保する」(19.9%)、

「内外装のデザインセンスを高めて、お洒落なものにする」(19.9%)、

「車両サイズをコンパクトなものにする」(17.1%)

この設問に「その他」という項目を設けて自由に書き込んでもらったところ、以下のような女性らしい視点が打ち出された。

「たいていのキャンピングカーには鏡や洗面台のような顔をメイクするスペースがなく、鏡があっても大きくない。また着替えや衣類を掛けておくスペースがない。更衣室の充実と照明へのこだわりは必要だと思う」

「旅が終わったときに掃除と片づけを考えると憂鬱。だから掃除がしやすい構造になっていることが大事」

「長旅したときの洗濯物を干すレールとかロープを張る場所を工夫したい。できれば、下着を干せるような場所も考えたい」

また、「現在の愛車で一人旅をしてみたいか」という設問に対しては、「家族(夫婦)旅行が楽しいので、一人旅は考えたことがない」という答が65.0%に達したが、「たまに家族から解放され、一人旅をしてみたい」(5.7%)、「現在すでに今の愛車で一人旅を楽しんでいる」(1.1%)という答も少数ながら寄せられた。

さらに、記述式の自由回答においては、「もし運転ができれば一人で旅したい」、「自分で自由に運転して、女性だけのキャンピングもしてみたい」という答も散見された。

その一方、「女性だけで旅するときは、セキュリティのことが一番気がかりとなるため、外から破られないような窓ガラスや大音量の防犯ブザーとかSOS機能があるといい」、「機械系は苦手なので、キャンピングカーの調子が悪くなったときは、原因も分からず、直すこともできない。だから一人で乗るには抵抗がある」などという声も聞かれた。



「旅」や「趣味」の話題が増えた」

第1位
57.9%

わが家にキャンピングカーが来て変わった事は?

業界の女性経営者が語り尽くす



国産キャンピングカービルダー
山口寿子さん



輸入キャンピングカー販売店
安達二葉子さん

対談

SPECIAL TALK

キャンピングカーライフは女性が創る時代

【司会】キャンピングカーを購入するとき、奥様方に購入決定権があるという話をよく聞きます。

つまり、旦那さんが選んだキャンピングカーでも、奥様が「NO」といえば、そのクルマは購入対象から外れてしまうといわれています。

一方、奥様が気に入られたクルマは、購入される率が高まるそうです。

そこで、旦那さんのキャンピングカー選び

と、奥様のキャンピングカー選びはどこが違うのか？

それにまつわる微妙な話を、「女性の願い」や「女性のホンネ」を交えながら、キャンピングカー販売に関わる女性経営者のお二方に語っていただきたいと思います。

キャンピングカーは男のロマンか？

【司会】まず、キャンピングカーに関心を持つのは、男が先か、女が先か、これに関してはどうですか？

【山口】キャンピングカーというのは、昔から「男のロマン」だったと思うんです。展示会やお店の方に来られる方々を見ても、まず旦那さんが興味を持っていると知識を身につけてから、奥さんを同伴して来られるというケースが多いんですね。

ただ、いつも感じるのは、やはりお二人の間に微妙なズレがあることなんです。奥様は、旦那様が気に入ったクルマに対して、必ずしも満足していない。あるいはその逆もあります。

ひとつ言えることは、多くの奥様方から見て、「今のキャンピングカーは女性にとってまだ完璧なものになっていない」ということなんです。

そこで、うちでは女性の意見をなるべく採り上げた商品開発をしたいと思い、女性の方々からアンケート調査や聞き込み調査を行ったりもしています。

【安達】日本人の場合、確かに旦那様の「男のロマン」から始まりますよね。

私の場合は、主人と一緒にヨーロッパを旅しているとき、主人が突然「キャンピングカーを買おう」といったのがキャンピングカーライフの始まりでした。

当時は、「旅」といえばホテルを泊まり歩くものだとばかり思っていましたから、「キャンピングカーの旅」といわれても、それが快適なのかどうか、そんなことすらイメージに浮かびませんでした。

でも、実際にキャンピングカーの旅を始めると、「自由」と「快適性」と「気楽さ」がすべて簡単に手に入ってしまう、世界観が変わりました。そういった意味で、主人の「ロマン」に感謝です。

奥様を“女王”にするのが秘訣

【司会】奥様たちが、旦那さんの選んだキャンピングカーに、満足するか、しないかという“分かれ目”には何があるんでしょう？

【山口】奥さんが元々キャンプが好きだったり、アウトドアに馴染みがあるようなカップルの場合は、好みが分かれることはほとんどないんです。

特にそういう夫婦に子供がいれば、親たちはキャンプを通じて、子供に「自然を学ばせたい」という意識を持つようになるでしょうから、キャンプ道具もしっかり積めるような、アウトドア志向の強いキャンピングカーを買われるケースが多いようです。

しかし、キャンプの経験のないような奥様の場合は、キャンプとかアウトドアというのは、ものすごく面倒くさく感じられるものなんです。

キャンプ場などで、火を熾して、ご飯を作って…というキャンプは、家の中の家事よりも負担感が強くなるんですね。

そうすると、キャンピングカーを買うよりも、やはりホテルに泊まる方が楽に思えるのでしょね。

【司会】では、奥様方にキャンピングカーの旅に関心を持ってもらうには、どうしたらいいのでしょうか？

【山口】ひとつは、まず旦那さんが、奥様にはぜったい負担をかけさせないような「旅のビジョン」を明確に打ち出すことでしょうね。

奥様方というのは、家庭にいるときは、さぞごん家事に手こずらされるわけですから、旅行に来てまで家事などをしたくない…というのがホンネでしょう。

だから、キャンプ場でバーナーを出して、お米を研いで、皿を洗って…というようなことまで奥様にやらせるようだと、キャンプの嫌いな奥様はまず乗ってこないでしょう。

【安達】ヨーロッパでキャンプ場に泊まっている人たちの間では、調理や洗い物は、みな旦那さんの役目なんです。

向こうのキャンプ場で、私が洗い場で皿を洗っていたときのことなんです、周りの旦那さんたちが私の主人に対して怒るんですよ。

「君は、お手伝いさんを雇っているつもりなのか？」って…(笑)。

でも、彼らだって、料理や片づけを率先して行うのは、別に奥さんの尻に敷かれているからではないんです。キャンプに来たときの「レジャーのひとつ」なんですって。普段やれないことを楽しんでいるんですね。





旦那さんが先行する日本。 夫婦が肩を並べるヨーロッパ

【安達】日本では、男性が先にキャンピングカーに興味を示し、奥様がそれに追従するという手順を踏みますけれど、ヨーロッパでは、夫婦が同時に興味を持つんですね。

それは、結婚生活というもののうち、最初から「何年ぐらい先にはキャンピングカーの購入を検討しよう」というプログラムが組み込まれているからなんです。

だからキャンピングカー販売店に最初に訪れるときから、ヨーロッパでは夫婦同伴です。そして、2人でほぼ同時に決めてしまう。

「家に帰ってから女房と相談してみる」とか、「話したら奥様が許してくれなかった」とか、旦那さんが語るケースは、向こうにはありません。

【司会】奥様方は、キャンピングカーのどんなところに注目するのでしょうか？

【安達】私は自分が買うときに、最初に注目はしたのがクルマの外形的なスタイルでした。

最初はキャンピングカーのことを何も知りませんでしたから、まず形の美しいものを

写真の中から選び、その後でそのクルマがわれわれ夫婦にとって妥当なものかどうか、主人に判断を委ねました。

【山口】やっぱり女性はどうしても視覚的なものから入っていきますよね。それも、まず自分の好みに合うかどうかを一瞬のうちに決めてしまいます。外装のグラフィックから家具の質感や色合いまで、ほとんど直感的に判断します。

ただ、女性というのは、そういう雰囲気だけで判断するだけでなく、「このクルマを買っても、元が取れるだろうか？ 使いこなせるだろうか？」という現実的な視線でもクルマを見ているものなんですね。

特に、いろいろな事情でセカンドカーを持っていないような場合は、その1台で買い物や送迎もこなさなければなりませんから、たいていの女性はサイズに敏感になります。

「私でも運転できるかしら？」というようなことは絶対見逃しませんね。

仮に、奥様が運転免許を持っていないくても、家の前の道路の幅とか、車庫との関係とか、そういうことを直感的に思い浮かべ、稼働率がどのくらいになるかなどを結構シビアに計算したりしています。

【安達】私のところが扱うようなキャンピングカーは、サイズも多少大きい輸入車が主流ですから、稼働率は高くないでしょう。

代わりにお客様がチェックされているのは「耐久性」ですね。

たとえば、「何度も買い換えるようなクルマではないので、長く満足して使えるかどうか」

それに関して、おもに男性はベース車の機構やメンテナンス体制に関心を持ち、女性は家具や装備類の造り込みに興味を示すというように、それぞれの見方でチェックされています。

男性は機能を求め、 女性は調和を生きる

【司会】家具や装備類の使い勝手などに関して、女性は何を基準にして自分の見方を定めているのでしょうか？

【安達】私は、その女性が育ってきた家庭環境とか、現在住んでいる住宅の環境などが意外と反映されているように思うんです。

だからシックなインテリアの中で育ってきた人は、クルマにもそれなりのテイストを求め、華やかな色柄のインテリアになじんできた人は、同じ傾向のクルマを好みます。

若いカップルなどの場合は、現在住んでいるマンションや住宅のインテリアの流行りが、そのままクルマの内装を選ぶときにも反映しているように思います。

【山口】「判断基準」ということに関していえば、やはり、小さい頃から「機械」に興味を感じる男の子と、「おままごと」を楽しめる女の子のそれぞれの“文化”がそのまま継続されているように感じます。

そのため、男性の場合は圧倒的に機能的なものに関する関心が高く、「サブバッテリーの増設は必要か」とか、「インバーターでどのくらい持つか」とか、「ソーラーを付けたらどうなる？」といった方向に話題が集中するんです。

けれど、女性は、そういうことは分からない部分なんです(笑)。

女性は、それよりも、そういう「電気」が確保されたときに、部屋の中にどう照明が実現されるのか？ そのことにより、家族と過ごすダイネットがどう雰囲気になるの

か？ そちらの方が大切なテーマなんですね。

【司会】そのような違いは、どうして生じるんでしょうね？

【山口】やっぱり、男性は昔から狩猟して、外でエモノをとってきて、妻子を養うという生活が“文化のDNA”みたいな形で残っているんじゃないでしょうか。

だから、エモノをしとめる武器の構造とか、狩を効率よく行うシステムなどに関心が向く。それに対して、女性は、男がとってきたエモノをどう家族に分配するか。どう調理して、みんなでおいしく食べるか。男の労働をどうねぎらってやるか…というような、常に「家族全体」のことを考えながら生きてきたと思うんです。

だから、女にとっては、「家族の関係」こそが大事なんですね。

キャンピングカーも同じであって、そういう男性と女性の組み合わせのバランスがうまく取れたときに、「よし買おう」という家族の決断が生まれると思います。

【安達】ヨーロッパの場合は、なおのことキャンピングカーを使う男女の分業体制がし

っかり確立されています。

クルマを安全に運転するのは男の役目。それを補佐して、男が眠くなったり、疲れたりしないように、話題にも気を配り、地図をチェックするなどしてケアするのは奥様の役目。

だから、ヨーロッパのキャンピングカーの場合は、助手席を「マダムシート」といったりすることもあります。

【山口】また、ファミリーのある家族には、「キャンピングカーがあれば子供の心が豊かになる」ということをぜひ理解してもらいたいと思うんです。

たとえば、食事を介して、子供たちに健康な食生活を伝えることを「食育」といったりすることがあるでしょ。

また、住宅などにおいても、住み方を工夫することで、子供に暮らし方を学ばせることを「住育」などともいいますよね。

それと同じように、「車育」という概念があってもいいように思うんです。

つまり、家族のコミュニケーションが密に取れるようなクルマがあれば、子供たちだって豊かな家族関係を学んでいけるようになると思うんです。



これからは「車育」の時代

【安達】「車育」というのは、本当にいい言葉ですね。確かに、キャンピングカーには、子供たちとコミュニケーションをとる材料がたくさん揃っていますね。

【山口】今の子供たちを見ていると、学校から帰ってきたらすぐ塾へ行って、10時頃家に戻ってきて、チラッとゲームして…。

それでは、いつ家族と向かい合って、いつ団らんするの？ と心配になってきます。

昔の家では、4畳半と6畳ぐらいの間取りに、親子5人ぐらいで生活したりしてきたわけですから、否が応でも家族同士で話し合う時間と空間を共有できたわけですね。

だけど、今の子供たちは贅沢に個室を持っていて、それぞれ自分のテレビを持っていて、しかも家族と一緒に食事をとることもない。

それでは、親は子供が何を考えているのか知る機会もなくなるし、子供も、親が何を考えているか分からない。

【司会】それを「キャンピングカー旅行」で解消しようかと…？

【山口】そうです。ファミリーでキャンピングカー旅行をすれば、どうしても狭いダイネッ

トを中心に、家族がみんな集うしかないわけですから、自然に会話も復活すると思うのね。

そのときに、ようやく子供は、自分の学校の交友関係の楽しさや悩みを話題にするかもしれない。

親も、キャンピングカー旅行を通じて、「ゴミを捨てる場所はどこか」とか、「公共駐車場で休むときのマナーはどうだ」とかいうことを、実践を通じて子供に伝えることができるわけですね。それが「車育」だと思うんです。

【安達】キャンピングカー自体が、「旅」そのものも豊かにするというのも子供たちに伝えたいですね。

塩野七生さんのエッセイに書かれていたことなんですけれど、「海外旅行に行くと、日本人は景色を見る前に写真を撮る」って。

で、景色は見ないで、日本に帰ってきてから写真を焼き増したときに景色を確認すると…(笑)。

しかし、そういう旅は豊かさにつながらないように思うんです。

日本人は、よく「写真に残す」とか、「お土産を買う」というように「形に残るもの」に気がつかいがちですけど、時には「形に残さない」旅も必要なのではないでしょうか。

記録に残すよりも、「今ここで味わって

おかないと二度と見られない景色だ」と思いながら風景を楽しんだ方が、後になって思い出すときに鮮明な記憶として残っていることが多いんです。

結局、どんなに宝石とかお金を手に入れても、死ぬ間際にはすべて手放さなければならぬ。そこには「思い出」しか持っていないわけですよ。

そういうことが理解できれば、キャンピングカーの中で家族と一緒に過ごす時間がどれほど貴重なことかということも、みんなで共有できると思うんです。

キャンピングカーの中で、家族と楽しい交流ができれば、過ぎていく時間がダイヤモンドの輝き以上のものになりますよ。

【山口】そういう意味で、キャンピングカーというのは、日頃それぞれ別の生活圏で暮らす家族が集まって家族の絆を確かめあう「ふるさと」ですね。

そういう場があってこそ、親子が共通した「趣味」を持てるようになると思うんです。

「趣味」というものは、親が本当に楽しんでいないと、子供に伝わらないんです。

たとえば、お父さんもお母さんも音楽にあまり興味がないのにもかかわらず、子供を「ピアノ教室」に通わせてあって、子供だって面白いはずがないんです。

親が本当に「楽しい」と思わないと、子



供は何も学ばない。

絵画教室だって、親がスケッチひとつ楽しむこともしないで、子供だけ通わせてあって、子供は何のためにそんなことをやるのか分からない。

だけど、キャンピングカー旅行って、両親のどちらかが、あるいはその両方が、「本当に楽しい!」と思って始めたわけですよ。これは絶対子供の心を動かしますよ。

【安達】それが「車育」ですね。私は「車育」の中には、「食育」も「住育」もすべて含まれるように思うんです。

だって、旅行に行けば、その産地の美味しいものをダイレクトに食べる機会が増えるわけですよ。

いま食べているものの産地を知り、素材を知る。それがキャンピングカーの中ですべてできるんです。そして、ものを食べるときのありがたさとか、食べるマナーなどを学ぶわけですよ。

また、キャンピングカーは動く「家庭」ですから、その中には「住育」も含まれます。

そういうものが、子供たちの脳の中に蓄積していけば、キャンピングカーで育った子は、ものすごく豊かな感性を持つ人間に成長する可能性があるわけですよ。

【山口】そうそう。だから、子供が思春期の

むずかしい年頃になっても、キャンピングカーを通じて親子のコミュニケーションをとっている人々は、気持ちを通じ合うんですよ。

反抗期になって、子供が急に口を利かなくなると、たいていの親はあわてて、「どうした? 何を考えているんだ? 話せ!」ときつく迫るけれど、子供の気持ちを分かっている親は、無理にそんなことをしないんです。

ただ、ギュッと抱きしめるような気持ちで、「いいのよ、しゃべらなくても。私はあなたを信じているから」というメッセージを、言葉にしないで伝えることができると思うんです。

それができるかどうかは、子供が小さい頃から親と一緒にキャンピングカー旅行を楽しんだという点にかかっているのではないのでしょうか。

親がキャンピングカーを好きなら子も習う

【安達】日本ではすぐ「中学生ぐらいになると子供が付いてこなくなる」と言いますが、ヨーロッパでも、子供はある程度の年になると、付いてこなくなるんですね。

ただ、向こうでは、中学生や高校生ぐらいになると、自分たちでキャンプを始めるんです。

もちろん、若いからお金もないのでテントキャンプが多いんですけど、大学生ぐら

いになると、もうお爺さんが使っていた古いトレーラーなどを引いて、自分でキャンピングカー旅行を始めるんです。

【山口】最近日本のキャンプ場でも、大学生ぐらい子供たちがコテージやバンガローなどを利用して泊まっているのを見ようになりましたね。まだキャンプ道具を揃えられないからそうしているのかもしれませんが、たぶん、その子たちは親がキャンプに連れていっていたのではないかしら?

【安達】日本でも、ようやくそういう流れが生まれてきたのでしょうか。

だから「キャンピングカーの旅に子供が付いてこなくなった」といってがっかりするのは早いんです。

そのお父さんとお母さんは、もうすごい役割を果たしているんですよ。すぐに芽がなくても、種まきをしたわけですから。

キャンピングカーの旅を楽しんだ子供たちは、絶対に自分たちでも始めるようになると思います。

【司会】キャンピングカーの可能性が大きく広がるような結論が出ましたね。ありがとうございました。